

## アトモスフィア

## 基礎医学教育に思う

栗原裕基\*

去る2012年2月4日、日本医学教育学会の主催で「基礎医学振興のための大集会」と銘打った集会在開かれた。日本生化学会からも、清水孝雄先生（東京大）が基調講演、末松誠先生（慶応大）が大学の取り組みについての報告をされるなど、数名が参加した。

基礎医学をとりまく環境は厳しさを増している。医療を巡る社会の意識や構造的変化などさまざまな要因が絡み合った結果、医学部教育の重心がより一層臨床教育にシフトし、基礎研究を志す医学生の激減、若い医師の研究志向の低下が全国的に顕在化してきている。こうした状況下で、基礎臨床を問わず研究マインドをもって新しい医学を発信できる「研究医 (physician scientist)」をいかに養成するか、が今日の医学教育における大きな課題である。こうした課題を学会横断的に議論し、基礎研究者が手を携えて提言をまとめていることとする今回の試みは、時宜に適った意義の大きいものであった。

本集会では、「PhD-MD コース」や「MD 研究者育成プログラム」など、各大学医学部における研究者育成のための取り組みとその成果が紹介された。とりわけ、これらのプログラムに参加して研究活動を行っている学生達が互いに発表・議論し合う複数大学合同リトリートによる交流が、学生の良い刺激になり、その後研究活動に参加する学生が大きく増えたという報告などには勇気づけられた。しかし現実には、過密な必修カリキュラムの中で研究に没頭できる時間を継続的に確保するのは、今の学生にとって至難の業である。そのためには、カリキュラムにおける自由度と多様性の確保が求められるが、一方では医学部教育においては人体と疾患に関する専門性の高い膨大な系統的知識と基本的技能の修得が要請されている。そして、その専門性こそが研究の道に進む場合も医学部出身者としての特徴づけであり、なおざりにすることはできない。従って、研究者育成プログラムの実効性を高めるには、基礎系教員だけではなく、臨床系教員との間で問題意識を共有し、医学教育全体の中で研究者育成をどのように実践していくべきかを共に検討していくことが肝要である。臨床中心となる医学部高学年ではなおさら、研究活動を推進するには臨床系教員の理解と協力が不可欠であろう。また、臨床教育の場での研究マインドの涵養も重要である。例えば、ベッドサイドにおける病態メカニズムに基づいた診断・治療方針決定の思考プロセスの訓練は、基礎医学研究を志す学生にとっても大きな糧になり、研究のモチベーションにもつながるはずである。逆に優れた臨床医は、市井にあっても臨床の現場に研究課題となる問いを見出すものである。こうした臨床医と基礎研究者との間で医学教育のあり方をともに検討し実践していく中で、基礎研究の重要性や研究活動に対する価値観を共有できるアトモスフィアが形成されていけば、それが学生の研究志向を育てる最も有効な土壌となるに違いない。

そして何よりも重要なことは、我々基礎研究者が研究の喜びを、身をもって伝えていくことであろう。基礎研究をとりまく環境の厳しさは時として目的と手段の主客転倒を引き起こし、学問の世界にさまざまな負の影響を及ぼしている現実もある。しかしその中であっても、Philosophie (愛智の精神) をもって自然と謙虚に向き合い、真理の発見に喜びを見出す研究姿勢に、知的好奇心に溢れた学生は必ず共鳴すると信じる。親の反対を押し切って基礎医学の道に進んだ医学部卒業生、あるいは将来研究一本でやっていけるのかという不安と戦いながら臨床から基礎に転身した多くの研究者の胸裡には、研究に対する熱い思いとともに尊敬する先輩研究者の姿があり、それが心の支えになっていたのではなかったか。そして今日、基礎研究を志す若き仲間がそうした姿を示すことが、我々が基礎医学教育に貢献する最も重要な道ではないか。

教育は、煎じ詰めれば個人と個人のつながりに帰する。Schoolとしての学問の伝統も、その長年にわたる積み重ねにより形成され継承されてゆくのだろう。基礎研究者が手をつなぎ、臨床医とも手を取り合い、そして自らを省みて研究の初心に戻り、基礎研究の喜びを若い学生に伝えていくことも、研究成果の創出とともに基礎医学に携わる我々の重要な使命の一つではないかと、自戒の念を込めて思う次第である。

\*東京大学大学院医学系研究科教授